

九州大学 ソーシャルアートラボ 公開講座

6.25.SUN 《第1回》 ソーシャリー・エンゲイジド・アートに ついての議論

進行/ジェームズ・ジャック
(ソーシャルアートラボ特別研究員、アーティスト)



第1回ゲスト
藤 浩志
美術家、秋田公立美術大学
大学院教授

7.30.SUN 《第2回》 アートを読みかえる ～フラットとリアルの思考～

進行/藤枝 守
(九州大学大学院芸術工学研究院教授、作曲家)



第1回ゲスト
鷺田 めるろ
金沢21世紀美術館
キュレーター

第2回ゲスト
アラタ・クールハンド
イラストレーター
文筆家



社会を読みかえる

近年、音楽ホールや美術館に限定されない場で多様なアート実践が次々とおこなわれ、アートの外延が広がっています。また、社会的な課題に対してアートを活用することへの期待も高まっています。こうした状況の中、九州大学ソーシャルアートラボではアートを「世界の見え方や関係性を変える仕掛け」と捉え、アートと社会の関係性をあらためて問いなおします。

第2回ゲスト
小崎 哲哉
エディター



各回/14:00 - 17:30

受講料/無料 ※要申込み(詳しくは裏面をご覧ください)

対象・定員/文化事業や地域づくりに携わっている方、
将来携わりたいと考えている方(各回50名)

会場/旧大名小学校内
福岡市スタートアップカフェ・イベントスペース
(福岡市中央区大名2丁目6-11)

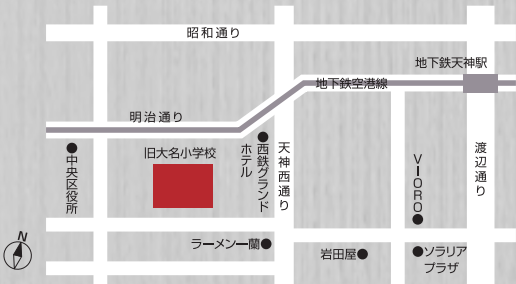
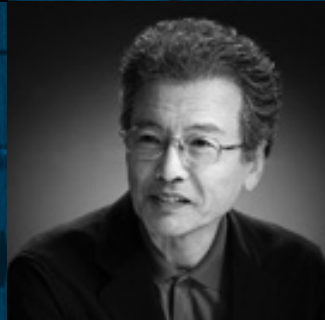
第3回ゲスト
榎本 了吉
クリエイティブ・ディレクター
プロデューサー



第3回ゲスト
萩原 朔美
映像作家、演出家
エッセイスト

8.27.SUN 《第3回》 メディアを読みかえる ～ビクラーゲーションの現在～

進行/藤枝 守
(九州大学大学院芸術工学研究院教授、作曲家)



第1回・6月25日(日)

ソーシャリー・エンゲイジド・アートについての議論

ソーシャリー・エンゲイジド・アート(社会と関わるアート)という言葉が2000年代ごろから欧米で聞かれるようになりました。アジア・パシフィックではどのような動きがあったのでしょうか?こうした活動はどのような社会の変化をもたらすのでしょうか?作品と同時にプロジェクトや運動をつくることは、芸術や社会にどのような意味をもたらすのでしょうか?福岡を拠点とした活動も数多いアーティストの藤浩志さんと、国内外で多数の参加型プロジェクトに関わってきたキュレーターの鷺田めるろさんを招き、複雑に展開する現実の中で、アジア・パシフィックの一部である福岡から、芸術と社会の双方に新たな視点を見つけ出すことを目指します。(ジェームズ・ジャック)

第2回・7月30日(日)

アートを読みかえる ～フラットとリアルの思考～

場所にこだわる。住み処にこだわる。拾得物にこだわる。日付にこだわる。移動にこだわる。行為にこだわる。記憶にこだわる。発信にこだわる。自分の体にこだわる。そのさまざまな「こだわり」に注視することによってアイデンティティの所在が確認され、そこから問いが生まれ、その答えが表現として読みかえられる。第2回、3回はシリーズとして、「こだわり」が読みかえのプロセスのなかで変容し、そこに「アート」や「メディア」といった領域が形成される状況を考えてみます。

第3回・8月27日(日)

メディアを読みかえる ～ビックラゲーションの現在～

地べたに根を下ろした住み処「フラットハウス」によって、居住空間の発想の転換を発信するアラタ・クールハンドさん。ウェブマガジン「REALKYOTO」や写真集『百年の愚行』などによって、現実(リアル)を編集する小崎哲哉さん。このおふたりから均質化する現状を読みかえる実践がみえてきます。そして、「ビックリ」と「コミュニケーション」を組み合わせた「ビックラゲーション」というセンセーショナルな造語を生み出した雑誌「ビックリハウス」の仕掛け人だった榎本了壹さんと萩原朔美さん。それぞれが歩んだ爆発的な活動の震源だった1960～70年代のパワーを現在に注入していただきます。ますます制度化されつつある社会の読みかえは、こだわりをもったアートから始まります。(藤枝守)

藤 浩志 Hiroshi Fuji

奄美大島出身の両親の影響で大島紬周辺で遊ぶ。京都市立芸術大学在学中演劇活動に没頭した後、地域社会を舞台とした表現活動を志し、各地の現場でプロジェクト型の表現を模索。同大学院修了後バブアニューギニア国立芸術学校に勤務し原初の表現と社会学に出会い、パブル崩壊期の再開発業者・都市計画事務所勤務を経て土地と都市を学ぶ。[地域資源・適性技術・協力関係]を活用したデモンストレーション型の美術表現により[対話と地域実験]を実践。 <http://geco.jp>

アラタ・クールハンド Coolhand Arata

東京生まれ。広告や挿絵、ロゴタイプの制作からパッケージデザイン、洋服の企画まで「描く」に関するオールラウンドな部分を仕事としTOKYOスカバラダイスオーケストラのツアーグッズ等を手掛ける。2009年、首都圏に残る古い平屋と、そこでの人々の暮らしを紹介した『FLAT HOUSE LIFE』(中央公論新社)を発売。2017年夏には、九州の平屋を取り上げた『FLAT HOUSE LIFE Kyusyu』(辰巳出版)をリリース予定。現在は東京都下の文化住宅と福岡市の米軍ハウスの2カ所を拠点に活動する真性“平屋フリーク”。

榎本 了壹 Ryoichi Enomoto

1947年、東京生まれ。武蔵野美術大学造形学部卒業。株式会社アタマテ・インターナショナル代表。京都造形芸術大学大学院客員教授。著書『アートウイルス』『東京モンスターランド』他多数。1968年より天井棧敷にかかわる。1974年、月刊『ビックリハウス』を萩原朔美と創刊。1980年より『日本グラフィック展』『オブジェTOKYO展』『URBANART』を1999年までプロデュース。1986年『世界デザイン博』住友館総合プロデュース。TOKYO2020オリンピック・パラリンピック・エンブレム委員。

鷺田 めるろ Meruro Washida

1973年、京都市生まれ。東京大学大学院美術史学修士課程修了。1999年より金沢21世紀美術館のキュレーターとして美術館の立ち上げに携わる。開館後、アトリエ・ワン、イエッペ・ハイン、島袋道浩、坂野充学の個展や「金沢アートプラットフォーム2008」「3.11以後の建築」など、現代美術や建築の展覧会を企画。第57回ヴェネチア・ビエンナーレ日本館キュレーター。

小崎 哲哉 Tetsuya Ozaki

1955年、東京生まれ。ウェブマガジン『REALKYOTO』発行人兼編集長。京都造形芸術大学大学院学術研究センター客員研究員。同大学舞台芸術研究センター主任研究員。2002年、20世紀に人類が犯した愚行を集めた写真集『百年の愚行』を刊行し、03年には和英バイリンガルの現代アート雑誌『ART iT』を創刊。13年にはあいちトリエンナーレ2013の「パフォーミングアーツ」統括プロデューサーを担当し、14年に『続・百年の愚行』を執筆・編集した。

萩原 朔美 Sakumi Hagiwara

1946年、東京生まれ。母は小説家萩原葉子、母方の祖父は萩原朔太郎。1969年、寺山修司主宰の演劇実験室「天井桟敷」の立ち上げに参加、演出家として活躍。1975年、月刊誌「ビックリハウス」をパルコ出版より創刊し、初代編集長を務める。著書に『演劇実験室・天井桟敷の人々』(2000年)『毎日が冒険』(2002年)『死んだら何を書いてもいいわ』(2008年)『劇的な人生こそ真実』(2010年)他多数。多摩美術大学名誉教授。2016年4月より前橋文学館館長。

■お申し込み方法 …………… 応募フォームかEメールからお申し込みください。

応募フォーム <http://www.sal.design.kyushu-u.ac.jp/> Eメール sal@design.kyushu-u.ac.jp

Eメールの場合は、以下の事項をご記載ください。

①参加希望の回 ②氏名(フリガナ) ③電話番号 ④メールアドレス ⑤所属 ⑥受講の動機

■お問い合わせ …………… 九州大学ソーシャルアートラボ TEL&FAX 092-553-4552